

# 柏市小山台遺跡出土の旧石器・縄文時代の石器

－本ノ木型尖頭器・木葉形薄型尖頭器・花輪台型五角形鏃の紹介と関連資料の検討－

橋本 勝雄

## はじめに

今回紹介する柏市小山台遺跡は柏北部東地区遺跡群の一角をなす。

柏北部東地区遺跡群とは、柏市の西部を横断する常磐新線（「つくばエクスプレス」）「柏たなか駅」の周辺に所在する柏市内の11か所の遺跡（小山台、原畑、矢船Ⅰ、矢船Ⅱ、富士見、大松、駒形、花前Ⅰ、花前Ⅱ、花前Ⅲ、館林Ⅱ）の総称である（第1図）。

発掘調査は、公益財団法人千葉県教育振興財団（旧・財団法人千葉県文化財センター）によって、平成10年度から実施され現在も継続中である。

これと並行して整理作業も行われ、逐次、報告書が刊行されてきたが、筆者は先に特に希少性が高く重要視される資料の紹介・検討を行った（橋本2016a）。

今回もその一環であり、報告書の刊行に先行して、新たに以下の（遺構外）出土遺物を資料化するとともに、関連資料の検討により、その歴史的位置づけを明

らかにしたい。

- ・資料1 小山台遺跡 (88) 出土 本ノ木型尖頭器
- ・資料2 小山台遺跡 (88) 出土 本ノ木型尖頭器
- ・資料3 小山台遺跡 (43) 出土 本ノ木型尖頭器
- ・資料4 小山台遺跡 (36) 出土 本ノ木型尖頭器
- ・資料5 小山台遺跡 (88) 出土 木葉形薄型尖頭器
- ・資料6 小山台遺跡 (88) 出土 木葉形薄型尖頭器
- ・資料7 小山台遺跡 (36) 出土 木葉形薄型尖頭器
- ・資料8 小山台遺跡 (36) 出土 花輪台型五角形鏃
- ・資料9 小山台遺跡 (31) 出土 花輪台型五角形鏃

## 1 資料の紹介（第2図・第5図）

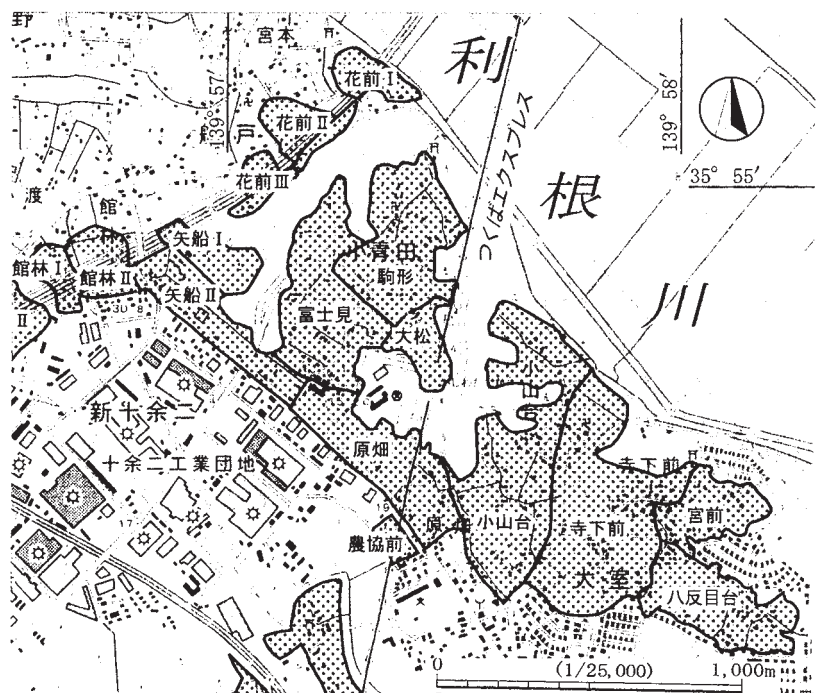
第2図（資料1～4）は旧石器時代終末期の本ノ木型尖頭器である。いずれも遺構外から散発的に出土した。石材は1・3・4が黒色頁岩、2がホルンフェル



柏北部東地区遺跡群

1	花前Ⅰ※	7	原畑
2	花前Ⅱ※	8	駒形
3	花前Ⅲ※	9	富士見
4	館林Ⅱ※	10	大松
5	矢船Ⅰ※	11	小山台
6	矢船Ⅱ		

※常磐自動車道建設に伴い一部調査済



第1図 柏北部東地区遺跡群関連遺跡分布図 新田2015を一部改変

スである。

1は下端部が若干欠損しているものの本来の形状を彷彿とさせる優品である（大きさ：長さ13.3cm、幅2.2cm、厚さ0.9cm、重さ29.84g）。二側縁はほぼ平行し、尖鋭で刃縁はジグザグを呈する。断面は凸レンズ状でやや肉厚である。表面中央部、裏面下部中央の稜上に部分的に磨耗痕を残すが、付着物は特に見受けられない。

2も遺構外出土であるが、位置的に1と近接している点が興味深い。大きさは長さ4.0cm、幅1.7cm、厚さ1.1cm、重さ5.10gを測る。端部の破片ではあるが、二側縁がほぼ平行し、断面が肉厚であることから本ノ木型の範疇に属することは明瞭である。ただし、風化が顕著なため詳細な検討に堪えない。

3（大きさ：長さ7.1cm、幅1.9cm、厚さ1.2cm、重さ17.32g）と4（大きさ：長さ3.6cm、幅1.8cm、厚さ1.1cm、重さ7.78g）は再加工痕（黒）をとどめる資料である。どうやら後世の縄文人が採集し、再利用を図った模様である。このような再加工例は当地では珍しいことではなく、良好な石器石材に乏しい地域の事情をよく反映している。

第5図1～4（資料4～7）は縄文時代草創期後半の木葉形薄型尖頭器である。いずれも東北頁岩製であり、薄手の剥片を素材として押圧剥離により薄手扁平に仕上げられている。局部磨製で両側縁は極めて尖鋭である。本来は完形品であるが、ガジリによる欠損が部分的にみられる。

1は完形品で大きさは長さ2.9cm、幅1.3cm、厚さ0.2cm、重さ1.06gを測る。器体の中央には平坦な平行剥離、周辺にはこれを縁取るかのような細かな加工（再加工？）が施されている。基部形態は凹基である。表裏中央部稜上に線状痕（長軸方向）を伴う研磨痕がみられる。

2は大型品（長さ4.5cm、幅2.0cm、厚さ0.3cm、重さ3.31g）である。上端部の損傷はガジリ（黒）によるものであり、本来は完形品と考えられる。基部は凹基に近い。器体には1と同様の研磨痕がみられる。

3は、縄文時代早期以降に再利用された特異な事例である。結果として凹基無茎鏃（大きさ：長さ2.4cm、幅1.3cm、厚さ0.3cm、重さ0.67g）となっており、器体の表裏には当初の剥離面（網点）と研磨痕の一部（黒）が共存している。

4は先の論考（橋本2016）で紹介済の資料であり、あくまでも参考例として掲げた。これを含めて小山台

遺跡では、これまでに都合4例が出土している。この数は小瀬が沢例に次ぐものであり、関東では最多といえる。

第5図5・6（資料8・9）は縄文時代早期前半（擦糸文期）の花輪台型五角形鏃である。ともに両面加工でありチャートを石器石材としている。

5は尖基鏃<sup>1)</sup>、6は平基鏃であり、大きさは、それぞれ長さ2.2cm、幅1.0cm、厚さ0.4cm、重さ0.65g、長さ2.8cm、幅1.9cm、厚さ0.3cm、重さ1.60gとなっている。

5の中央部稜上はトロトロに磨耗しており、線状痕もみられる。これに対して6には磨耗痕はないものの極めて精緻な平坦剥離によって扁平に仕上げられている。

## 2 関連資料の検討（第3～第5図）

次に、先に紹介した本ノ木型尖頭器、木葉形薄型尖頭器及び花輪台型五角形鏃について、順次、関連資料との比較検討を行ない、三者の歴史的な位置づけを考察する。

### （1）本ノ木型尖頭器（第3・第4図）

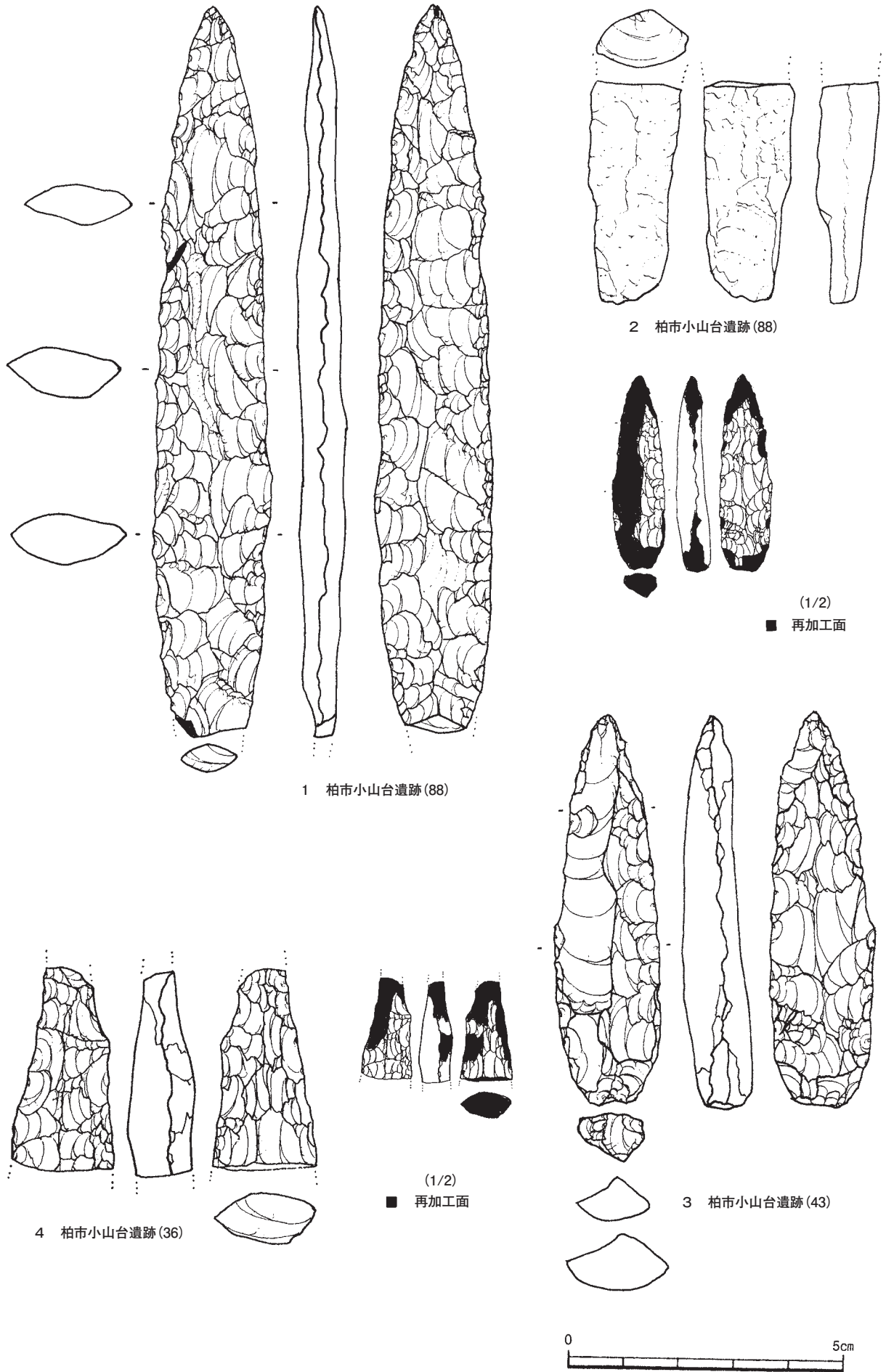
本ノ木型尖頭器（以下「本ノ木型」という）とは、新潟県津南町本ノ木遺跡を標式とする、狭長で両側縁が平行する柳葉形の尖頭器である（橋本2012・2014a）。この型式の尖頭器は、幅に対する規制が強いが、長さの変異は大きい。また、総じて、欠損率が高く90%を超える。このため当初の形態把握は困難である。

石器組成は、尖頭器、ノッチ、石斧、搔器、削器、有溝砥石、石錐等であるが、尖頭器とノッチが基本形（狩場の装備）をなす。

基本的に初期の製作工程（素材生産の段階）が欠落しており、東京都あきる野市前田耕地遺跡例が唯一である。当該遺跡の製作システムは、礫、分割礫及び縦長・横長剥片を素材とした5つに区分され多様である。

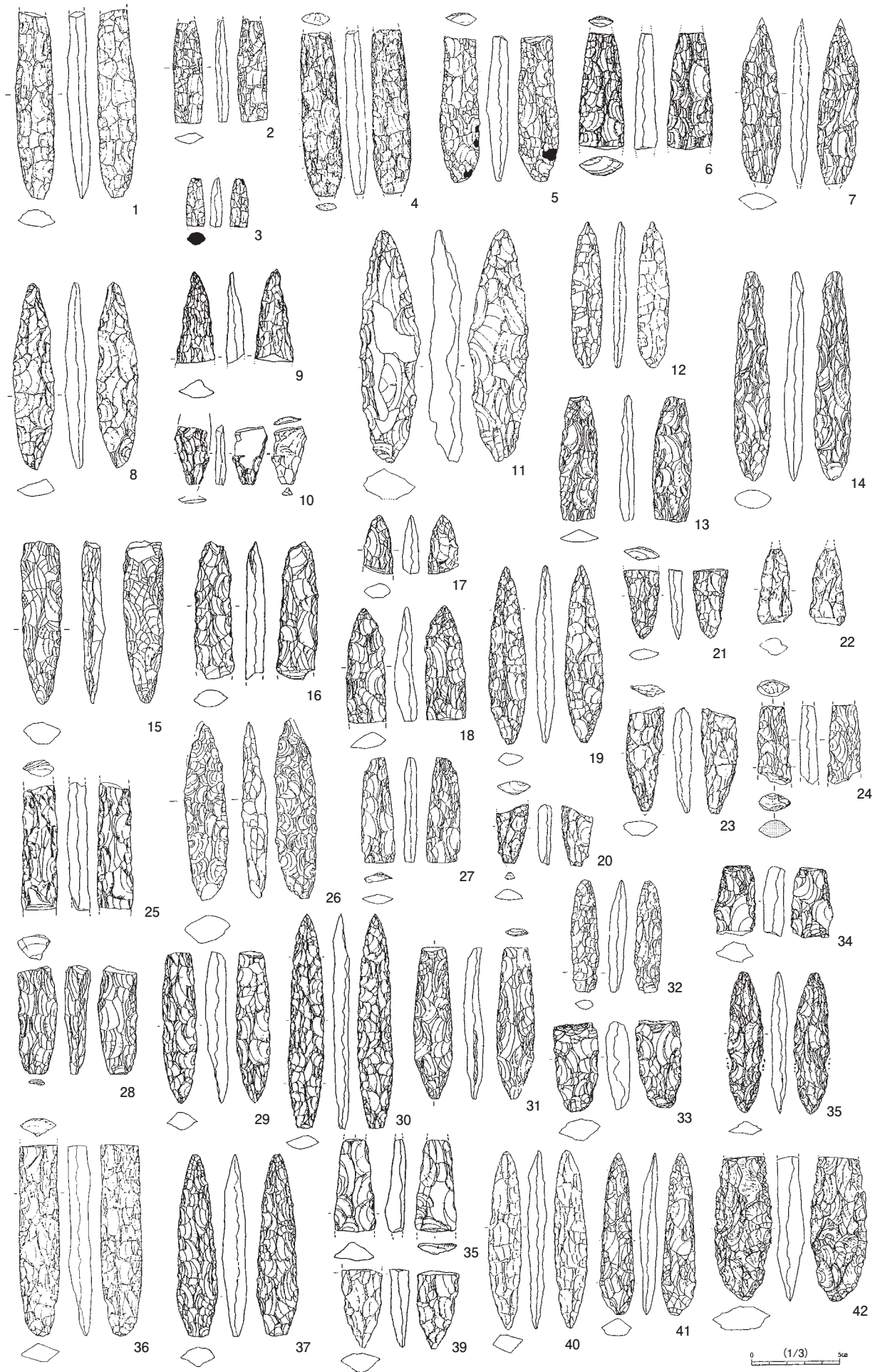
また、折損後の再加工（先端部・基部）が普遍的であり、欠損パターンから当該型式の使用法を検討した橋詰潤の分析結果と整合性がある（橋詰2009）。

岩種は、黒色頁岩、チャート、硬質頁岩、ガラス質黒色安山岩、緑色凝灰岩、ホルンフェルス、トロトロ石、砂岩、ノジュール、流紋岩等、おおむね北関東系の多様な石材で構成されるが、一部に東北頁岩（茨城県尾崎前山遺跡（第4図5）、栃木県釈迦堂山c遺跡、千葉県天神峰最上（空港No64）遺跡（第4図30））も

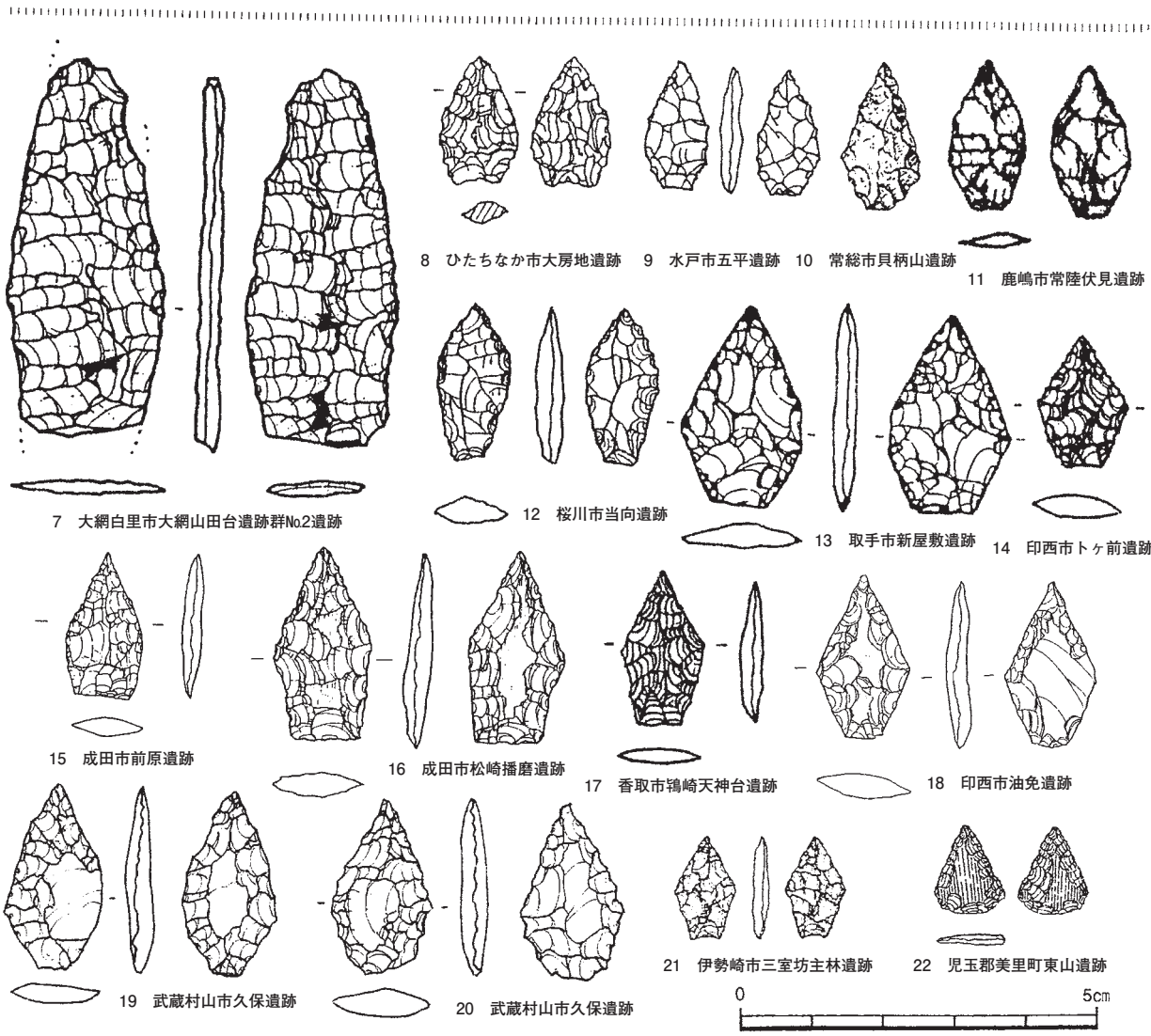
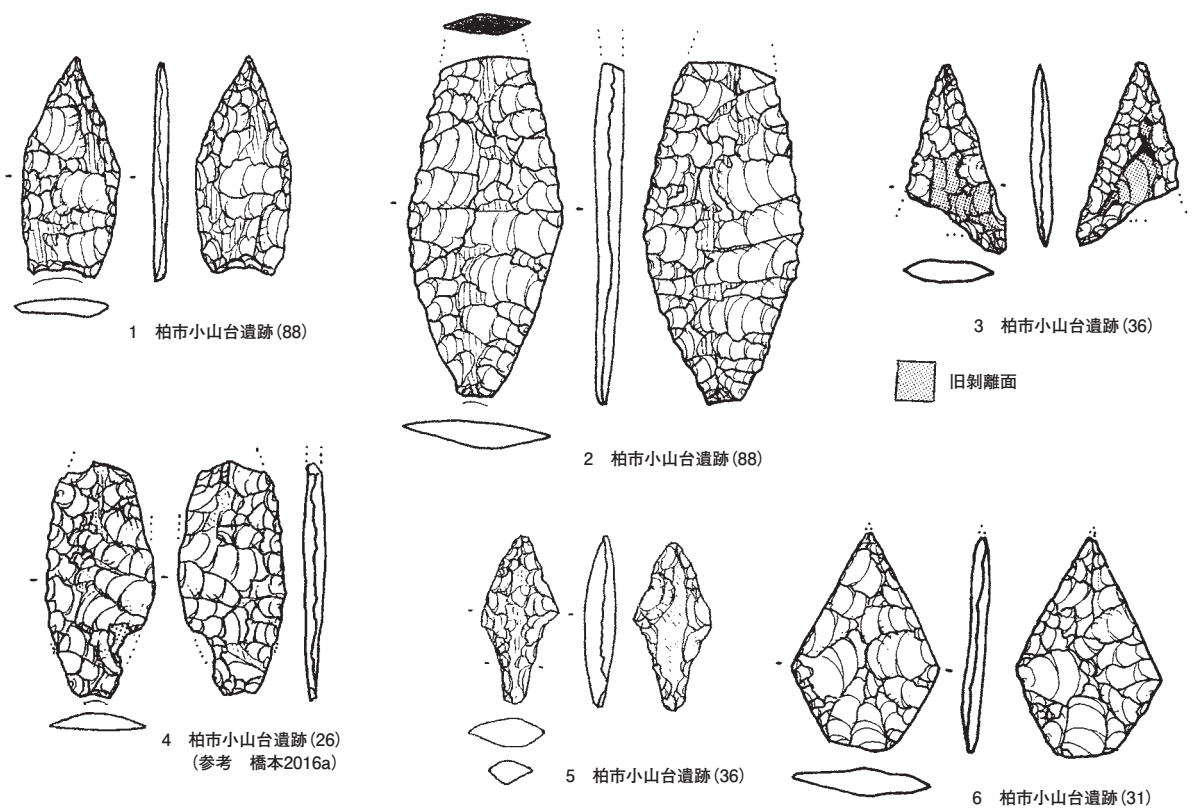


第2図 柏北部東地区小山台遺跡出土石器 (1) 本ノ木型尖頭器

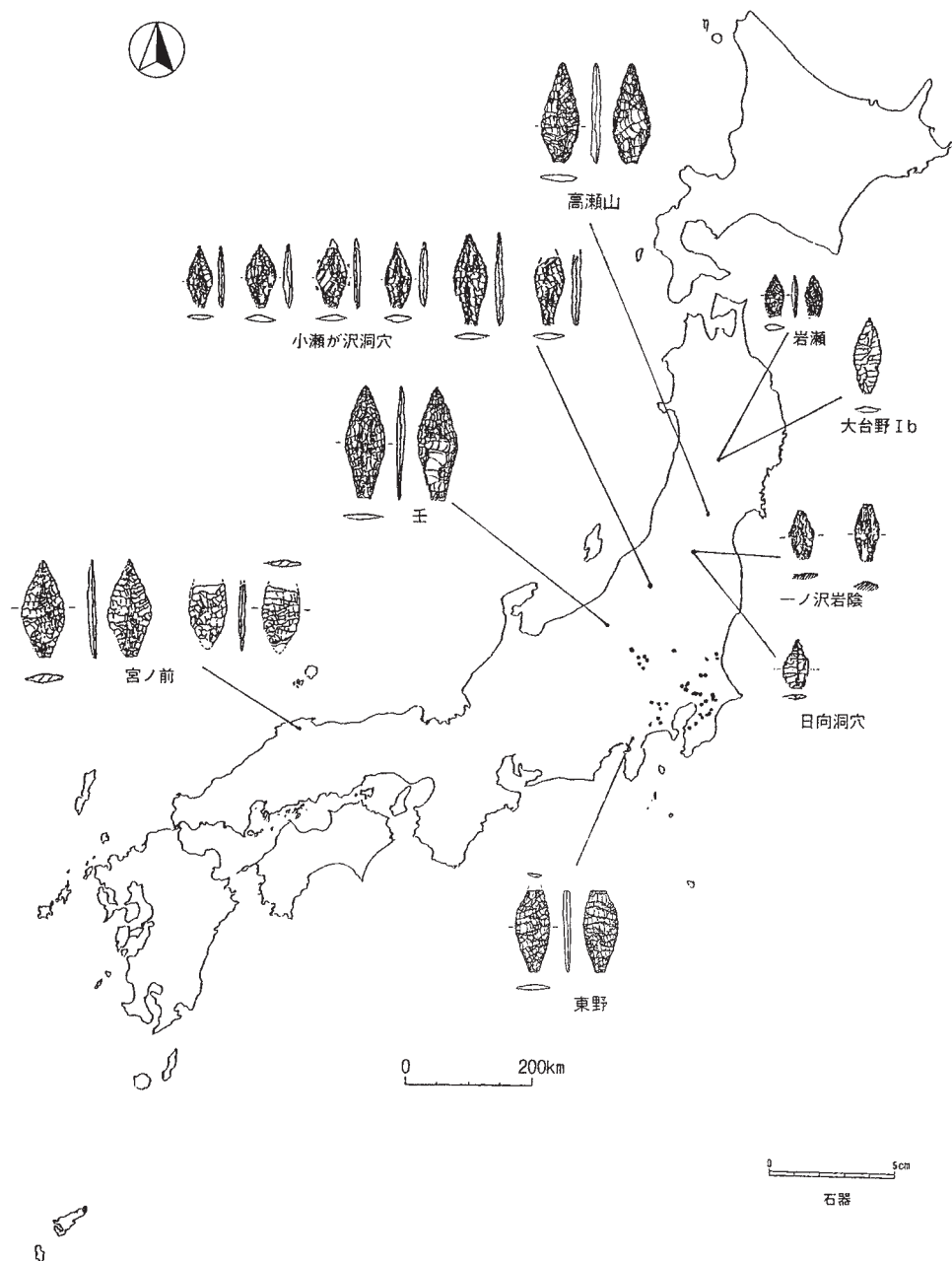




第4図 本ノ木型尖頭器の追加資料 橋本2012a・2014aを補填



第5図 柏北部東地区小山台遺跡出土石器(2) 木葉形薄型尖頭器・花輪台型五角形鏃 下段: 関連資料



第6図 木葉形薄型尖頭器の関連遺跡分布図（全国） 橋本2016cを一部改変

垣間見られる。

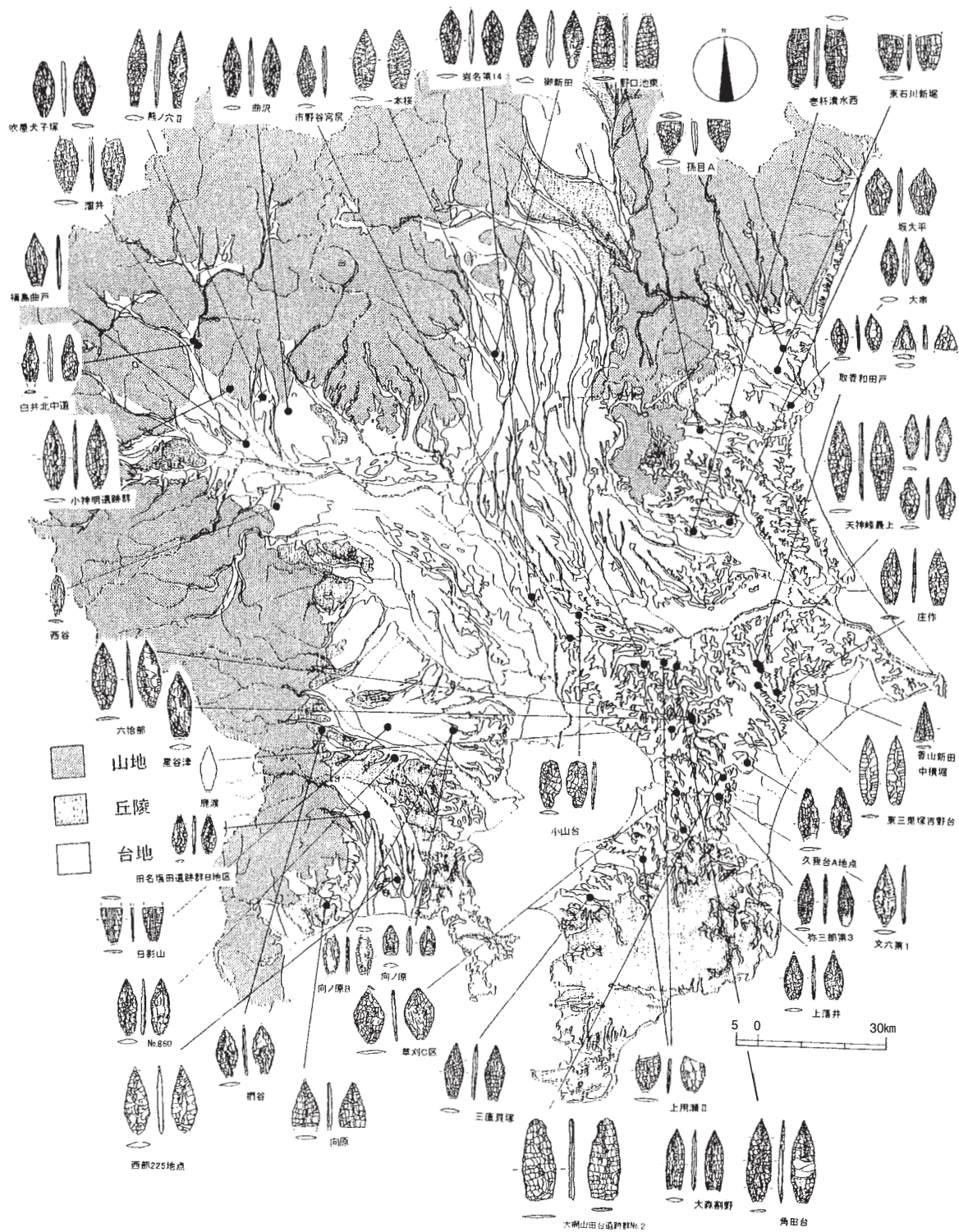
器種ごとの石材選択が見られ、尖頭器が黒色頁岩を主体としているのに対して、ノッチは、尖頭器に比べより硬く耐久性のある硬質頁岩、チャート及びメノウが用いられている。また、その素材はポイントフレイクである。このことは遺跡の連鎖構造の一環といえよう。

関連遺跡は当初は86か所（橋本2012）にすぎなかったが、その後、調査の進展により、やや増加に転じ、現在では関東を中心として都合123か所・3,800点超（福島1、新潟6、長野2、岐阜1、茨城5、栃木3、群

馬11、千葉67、埼玉9、東京12、神奈川6）を数える。また、この中には本ノ木遺跡や前田耕地遺跡など尖頭器類の出土量が1,000点を超える大規模な製作遺跡もあるが、単独出土が通例であり、大半は狩場（使用の場）としての性格を有しているものと考えられる。

なお、追加資料を第4図に掲げたが、関東に多く、かつての鬼怒川（近世初頭以前）と現在の相模川にはさまれた区域に遺跡が集中する状況には変化はない（第3図）。

さて筆者は先に黒色頁岩は本ノ木遺跡の近傍や群馬方面で産するが、群馬方面に格別製作遺跡がないこと



第7図 木葉形薄型尖頭器の関連遺跡分布図（関東） 橋本2016cを一部改変

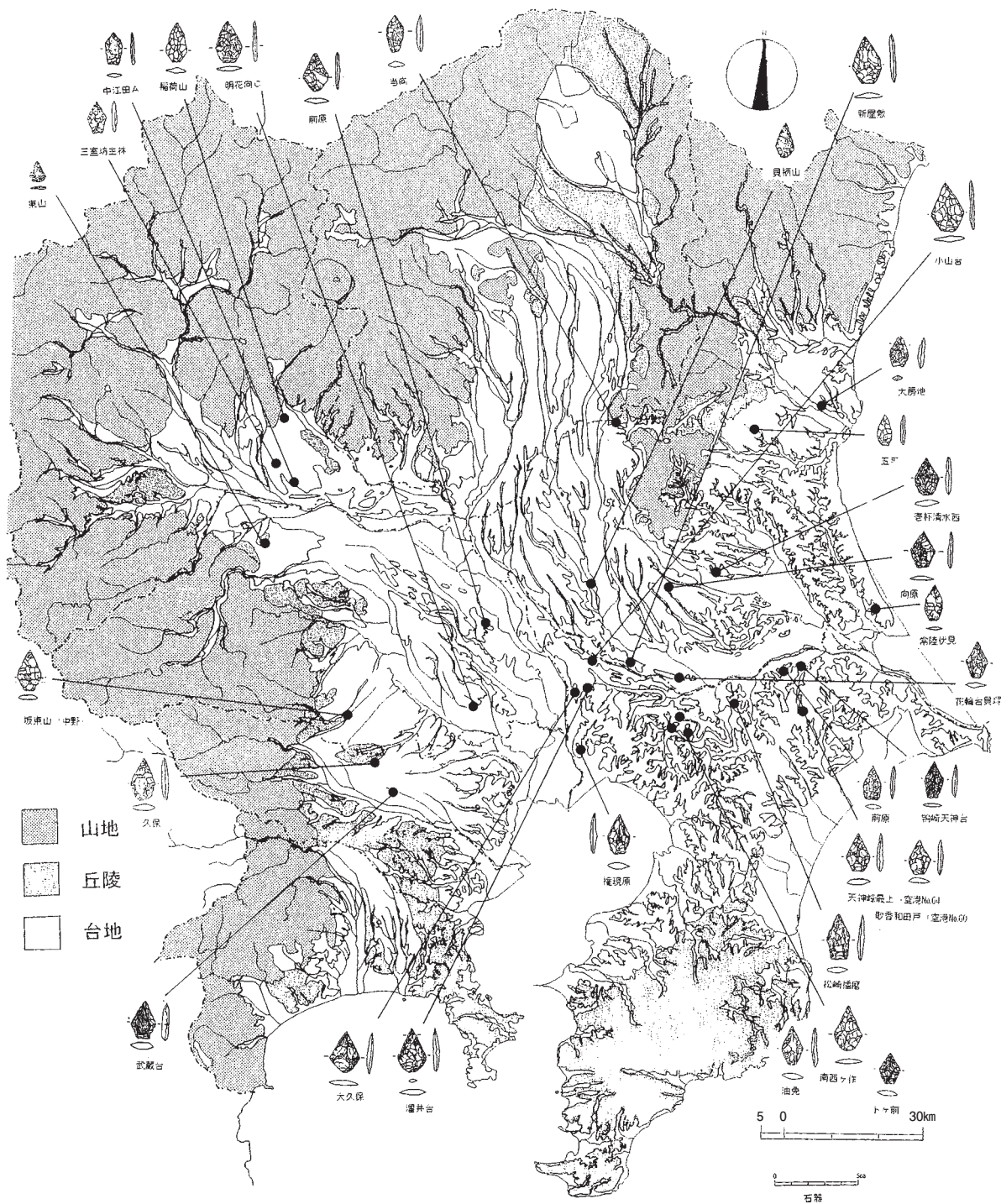
から、本ノ木遺跡（新潟県津南町）から関東方面への山越えルートの可能性を示唆した（橋本2012a・2014a）。

この見解に対しては、群馬方面での今後の発見を期待する向きもあるが、表層近くに包含層がある旧石器時代終末期の遺物の発見に関しては、本ノ木型の分布域内では、ほぼ同一の条件下にあったと想定される。まして群馬方面は南関東と調査進度が劣るわけではな

い。ちなみに、本ノ木型尖頭器と時期的に近接する北方系細石刃石器群は、関東ではこれまで古利根川（現・荒川筋）以東で65か所の関連遺跡が発見されているが、群馬県の遺跡数（14か所）は比較的多く、千葉県（25遺跡）に次ぐものとなっている（橋本2012bほか）。

さらに、新潟方面でも製作地の本ノ木周辺に遺跡分布が限られることや、ポイント剥片を素材としたノッチの主要石材である珪質頁岩に外来的性格があること





第8図 花輪台型五角形鏃関連遺跡分布図（関東） 橋本2016cを一部改変

も製品の山越え説を補強している<sup>2)</sup>。

以上のように、群馬県内の希薄な遺跡分布は、みかけの現象ではなく、実態に近いものと考えざるを得ない。

## (2) 木葉形薄型尖頭器（第5～第7図）

木葉形薄型尖頭器は縄文草創期後半に出現する。形態は極めて薄手扁平であり、押圧剥離による器体の整

形後、しばしば研磨により器面中央部の剥離面の高まり（稜）が除去され、平坦に整形されている。その頻度は約80%と極めて高率である。石材は東北頁岩を主とする。

関連遺跡の分布域は東北地方から中国地方であり、特に関東地方で頻出している。

筆者の先の集計では、関東では45遺跡・51点を数え、関東以外からは9遺跡・16点（島根県宮ノ前遺跡、

静岡県東野遺跡、新潟県壬遺跡・小瀬が沢洞穴、山形県日向洞穴・一ノ沢岩陰・高瀬山遺跡、岩手県大台野遺跡、秋田県岩瀬遺跡)の資料が出土していた(橋本2016c)。

その後、今回の小山台例のほか大網白里市で1例確認した。これによって関東の資料数は都合46遺跡(計55点)ということになった。

第5図7は大網白里市大網山田台遺跡群No.2遺跡の遺構外出土の資料である(田村ほか1994)。残念ながら両端(上端はガジリ)が欠損しているため上下の位置関係が不明であるが、部分的であるにもかかわらず大きさは長さ5.3cm、幅2.2cm、厚さ0.3cm、重さ3.3gを測り、かなり大型である。両面とも剥離面の境目に生じる稜上の高まりを部分的に研磨(黒)している。石材は報文ではチャートとなっていたが、実見の結果、東北頁岩であることが判明した。

木葉形薄型尖頭器は、当初は稀少性の高い資料であったが、一旦、認知されるや雨後の筍のように相次いで発見されるようになった。これもやはり世の習いといえよう。

### (3) 花輪台型五角形鏃(第5図・第8図)

花輪台型五角形鏃は撚糸文末期(撚糸文Ⅲ期)に登場する特異な形状の石鏃である。関連遺跡は、関東中部を中心として分布している(橋本2016b・2016c)。

遺構外からの単独出土が大半であるが、茨城県花輪台遺跡(貝塚)や東京都武蔵台遺跡では多数出土しており、中には撚糸文末期の住居跡からの出土例もある。

形態は扁平で、調整技術は両面加工で平坦剥離を基本とする。また、少ないながら花輪台遺跡、向原遺跡、権現原遺跡、及び武蔵台遺跡では資料の一部に局部磨製のものがある。石材はチャートが主体である<sup>3)</sup>。

花輪台型五角形鏃は、筆者の先の集計では14か所を数えたが、今回の執筆に伴いさらに精査したところ、小山台遺跡の2例の他に、第8図に掲げたように16遺跡・17点(茨城県ひたちなか市大房地遺跡(鴨志田ほか1989)・水戸市五平遺跡(斎藤1991)・常総市貝柄山遺跡(江坂1979)・鹿嶋市常陸伏見遺跡(小野・秋本ほか1979)・桜川市当向遺跡(片野・青木2007)・取手市新屋敷遺跡C地点(宮内1997)、東京都武蔵村山市久保遺跡(橋口・高橋ほか1991)、群馬県伊勢崎市三室坊主林遺跡(原1989)・みどり市稲荷山遺跡(若月1980)・太田市中江田A遺跡(小宮ほか1997)、埼玉県児玉郡美里町東山遺跡(宮崎ほか1980)、千葉県

成田市松崎播磨遺跡(永沼1993)・同前原遺跡(小川2004)・印西市油免遺跡第2地点(阿部2004)・同トヶ前遺跡(喜多・飯島1992)・香取市鶉崎天神台遺跡(荒井1994))が新たに追加された。

この中では、小山台例(第5図6)に大きさ・形態が酷似する新屋敷遺跡(長さ2.9cm、幅1.8cm、厚さ0.4cm、重さ1.0g)や局部磨製の松崎播磨遺跡、東山遺跡及び中江田A遺跡の出土例が特筆される。

### おわりに

以上のように、小山台遺跡出土の本ノ木型尖頭器、木葉形薄型尖頭器、及び花輪台型五角形鏃の資料紹介を行い、併せて、関連資料との比較検討を試みた。

総じて、遺跡分布、帰属時期、技術・石材に関する従来の知見を変更するものではないが、資料の増加によりその型式内容をさらに充実させることとなった。紙数の関係で語り尽くせなかったことも多々あるが、今回の試みが今後の研究の一助となれば幸いである。

### 謝辞

執筆に当たり以下の方々・機関に御指導・御協力を賜りました。特に、武蔵村山市久保遺跡の花輪台型五角形鏃については、市教育委員会の特段の御配慮により再実測が可能となった。

末筆ながら謹んで御礼申し上げます。

武蔵村山市教育委員会、大網白里市教育委員会、松戸市立博物館、川崎市市民ミュージアム、千葉市文化財調査センター、市原市埋蔵文化財調査センター、公益財団法人ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社、鈴木素行、高城大輔、島立桂、白鳥章、山岡磨由子、小菅将夫(順不同・敬称略)。

### 注

- 1) 尖基鏃(ないしは有茎鏃)については、東京都武蔵台遺跡に類例がある(河内ほか1994)。
- 2) 本ノ木遺跡では類似の石材が多用されており、珪質頁岩の産地については津南町周辺の可能性がある。
- 3) 追加資料の中では大房地例のみ白メノウ製(鈴木素行氏からご教示)、その他はいずれもチャート製である。

### 引用参考文献

- 青木秀雄ほか 1983 『前原遺跡』 宮代町教育委員会  
阿久津久ほか 1981 『尾崎前山』 八千代町教育委員会  
阿部有花 2004 『油免遺跡(第2地点)』 財団法人印旛郡市文化財センター  
荒井世志紀 1994 『鶉崎天神台遺跡』 財団法人香取郡市文化財センター  
稲田健一ほか 2013 『鷹ノ巣Ⅱ』 財団法人ひたちなか市生

- 活・文化スポーツ公社
- 江坂輝弥 1979 「33 貝柄山貝塚」『茨城県史料 考古資料編 先土器・縄文時代編』 pp.114-117 茨城県史編さん第一部会原始古代史専門委員会編 茨城県
- 大賀健ほか 2012 『三明寺古墳群』 有限会社 勾玉工房Mogi
- 大島孝博・齊藤和浩 2015 『西泉田伏木遺跡 山崎遺跡群』 公益財団法人 茨城県教育財団
- 大森隆志 1995 『東平賀貝塚 (10次)』 松戸市教育委員会
- 小川和博 2004 「前原遺跡」『下総町史 原始古代・中世編 史料集』 pp.32-40 下総町史編さん委員会
- 小栗信一郎ほか 2015 『流山市三輪野山遺跡群発掘調査概要 報告書』 流山市教育委員会
- 忍澤成規ほか 2013 『市原市天神台遺跡 I』 市原市教育委員会
- 小野真一・秋本真澄ほか 1979 『常陸伏見』 伏見遺跡調査会
- 片野靖久・青木亨 2007 『北関東自動車道 (協和～友部) 建設事業地内埋蔵文化財調査報告書 当向遺跡 2 青木北原遺跡』 財団法人 茨城県教育財団
- 香取正彦ほか 2008 『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書 XX - 印西市南西ヶ作遺跡・本埜村式ト込遺跡 -』 財団法人 千葉県教育振興財団
- 嶋志田篤二ほか 1989 「第 4 章 金上埜・大房地遺跡」『昭和 63 年度 勝田市内遺跡発掘調査報告書』 pp.17-49 勝田市教育委員会
- 河内公夫ほか 1994 『武蔵台遺跡 II - 資料編 2 -』 都立府中病院内遺跡調査会
- 河本雅人ほか 2005 『古淵 B 遺跡旧石器時代資料再整理調査報告書』
- 菊池健一 2000 『千葉市遠坪遺跡』 財団法人千葉市文化財調査協会
- 喜多裕明・飯島伸一 1992 『千葉県印旛郡印旛村 トヶ前遺跡発掘調査報告書』 財団法人印旛郡市文化財センター
- 喜多裕明 2011 『道作古墳群 (第 2 次)・馬場遺跡第 5 地点 (第 1 次・第 2 次)』 財団法人印旛郡市文化財センター
- 栗田則久ほか 2006 『東関東自動車道 (木更津・富津線) 埋蔵文化財調査報告書 5 - 君津市鹿島台遺跡 (A 区・D 区) -』 財団法人千葉県教育振興財団
- 江南町史編さん委員会 1995 『江南町史 資料編 1』
- 小林達雄・岡本東三・佐藤雅一・渋谷賢太郎・久保田健太郎 2016 『本ノ木遺跡 第一次・第二次発掘調査報告書』 津南町教育委員会
- 小宮俊久ほか 1997 『中江田遺跡群 中江田宿通遺跡 中江田本郷遺跡 中江田原遺跡 中江田 A 遺跡』 新田町教育委員会
- 斎藤弘道 1991 『一般県道友部内原線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書 五平遺跡・蔵田千軒遺跡・権現古墳群』 財団法人茨城県教育財団
- 蔀淳一・酒井弘志・宮文子 1994 『公津東遺跡群 I』 財団法人印旛郡市文化財センター
- 柴田龍司・宮重行 1986 『千葉市辺田山谷遺跡』 財団法人千葉県文化財センター
- 白井久美子ほか 2014 『首都圏中央連絡自動車道埋蔵文化財調査報告書 22 市原市柏野遺跡』 公益財団法人千葉県教育振興財団
- 関根孝夫ほか 2004 「下水遺跡第 1 地点発掘調査報告書」 松戸市遺跡調査会
- 高城大輔 2016 「槍と鎌～柏市内出土の特徴的な石器 2 例～」『第 9 回千葉県北西部地区文化財発表会 これって何? ～くらしの中の知恵と技～』 pp.2-5 千葉県北西部地区文化財行政担当者連絡協議会
- 高橋賢一・伊藤智樹 1986 『主要地方道成田松尾線 IV 小池元高田遺跡 柳谷遺跡 上宿遺跡 井森戸遺跡』 財団法人千葉県文化財センター
- 田島新 2005 『千原台ニュータウン XIII - 市原市草刈遺跡 (西部地区旧石器時代) -』 財団法人千葉県文化財センター
- 田中英世 2007 『千葉市芳賀輪遺跡』 財団法人千葉市教育振興財団
- 田村隆ほか 1994 『大網山田台遺跡群 I - 縄文時代編 -』 財団法人山武郡市文化財センター
- 田村隆・小高春雄 2015 『首都圏中央連絡自動車道埋蔵文化財調査報告書 27 市原市大和田遺跡群 (4)・(5)・(6)』 公益財団法人千葉県教育振興財団
- 當真嗣史ほか 2001 『請西遺跡群発掘調査報告書 VII 庚申塚 A 遺跡・庚申塚 B 遺跡』 木更津市教育委員会
- 中野修秀 2000 『杵掛貝塚 - 金谷郷遺跡群 III -』 財団法人山武郡市文化財センター
- 中野修秀・椎名信也 2003 『池田丸山遺跡 山荒久遺跡 沖荒久遺跡 - 金谷郷遺跡群 VI -』 財団法人山武郡市文化財センター
- 永沼律朗 1993 『主要地方道成田安食線道路改良事業に伴う埋蔵文化財調査報告書 II』 財団法人千葉県文化財センター
- 並木忠良・林勝則・渡辺謙 1992 『飯倉鈴歌遺跡発掘調査報告書』 飯倉遺跡発掘調査会
- 新田浩三 2015 『柏北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書 8 - 柏市富士見遺跡・原畑遺跡・駒形遺跡 - 旧石器時代編 -』 公益財団法人千葉県教育振興財団
- 萩野谷悟・橋本勝雄 2016 「茨城県常陸大宮市採集の石槍 2 点」『茨城県考古学協会誌』 第 28 号 pp.137-148
- 橋口尚武・高橋健樹ほか 1991 『久保・アタゴ松・残堀東 - 昭和 63 年度・平成元年度・平成 2 年度埋蔵文化財調査報告書』 武蔵村山市教育委員会
- 橋詰潤 2009 「『刺突具』利用の変遷に関する一試論 - 新潟県域における杉久保石器群から縄文草創期の比較から -」『新潟県の考古学』 II pp.39-58 新潟県考古学会
- 橋本勝雄 2012 a 「本ノ木型尖頭器総論 - 槍と植刃器のかかわり -」『研究紀要』 第 9 号 pp.1-30 財団法人印旛郡市文化財センター

橋本勝雄 2012b 「北方系細石刃石器群の研究」『シンポジウム北関東地方の細石刃文化 予稿集』 pp.2-12 岩宿博物館・岩宿フォーラム実行委員会

橋本勝雄 2014a 「岩宿フォーラム 「本ノ木型尖頭器・木葉形薄型尖頭器、そして移行期の石器編年」『シンポジウム時代の変革と石器の変遷－旧石器から縄文石器へ－ 予稿集』 pp.56-67 岩宿博物館・岩宿フォーラム実行委員会

橋本勝雄ほか 2014b 『西八千代北部地区埋蔵文化財調査報告書4 八千代市東向遺跡・坪井向遺跡・川向遺跡・庚申山塚群・八王子台遺跡』 公益財団法人千葉県教育振興財団

橋本勝雄 2016a 「〈研究ノート〉 柏北部東地区出土の旧石器・縄文時代の石器3例－木葉形薄型尖頭器・大型尖頭器・国府型ナイフ形石器の紹介と関連資料の検討－」『研究連絡誌』第77号 pp.1-9 公益財団法人千葉県教育振興財団

橋本勝雄 2016b 「「駿豆五角形鎌」と出現期石鎌のかかわり－縄文早期押型文期における石器の地域相－」『静岡県考古学研究』47 pp.1-13 静岡県考古学協会

橋本勝雄 2016c 「関東・中部における石鎌の出現とその系譜－縄文草創期から縄文早期前半まで－」『茨城県考古学協会誌』第28号 pp.1-40 茨城県考古学協会

橋本勝雄ほか 2017 『印西市山崎遺跡』 公益財団法人印旛郡市文化財センター

原田昌幸ほか 2005 『万福寺遺跡群』 有明文化財研究所、万福寺遺跡群発掘調査団

原雅信 1989 『三室坊主林遺跡』 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

古内茂 2012 『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書XXVI－印西市角田台遺跡（旧石器・縄文時代編）－』 公益財団法人千葉県教育振興財団

細谷正策ほか 1987 『－宇都宮競馬場附属総合きゅう舎建設地内遺跡－ 御新田遺跡 富士前遺跡 ヤッチャラ遺跡 下り遺跡』 栃木県教育委員会

松川由次ほか 2011 『松戸市下水遺跡 第6,7地点発掘調査報告書』 松戸市遺跡調査会

宮内良隆ほか 1997 「第10章 新屋敷遺跡C地点」『茨城県取手市 取手市内遺跡発掘調査報告書』 pp.35-68 取手市教育委員会

宮崎朝雄ほか 1980 『関越自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告－X－ 甘粕山』 埼玉県教育委員会

宮田圭祐 2016 「〔資料紹介〕 館林市の後期旧石器終末－縄文時代草創期の石器について」『利根川』38 pp.125-128 利根川同人

宮重行ほか 2001 『新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書XV－天神峰最上遺跡（空港No64遺跡）9－』 財団法人千葉県文化財センター

宮重行ほか 2004 『新東京国際空港埋蔵文化財調査報告書IX－東峰御幸畑東遺跡（空港No62遺跡）－』 財団法人千葉県文化財センター

矢本節朗・渡邊高弘 2005 『新鎌ヶ谷地区埋蔵文化財調査報告書II 鎌ヶ谷市五本松No3遺跡2』 財団法人千葉県文化財センター

吉田直哉 2003 『小野山田遺跡群III』 財団法人山武郡市文化財センター

若月省吾 1980 『笠懸村稲荷山遺跡』 笠懸村教育委員会

## 追記

脱稿後、新たに木葉形薄型尖頭器の関連資料3点（千葉県香取市多田綱原遺跡、群馬県渋川市三原田諏訪上遺跡、及び埼玉県鶴ヶ島市鶴ヶ丘遺跡）の所在に気づいたので追加しておく。いずれも発掘調査により遺構外から出土している。

多田綱原例（長さ3.4cm、幅1.7cm、厚さ0.4cm、重さ1.87g）と鶴ヶ丘例（長さ9.8cm、幅1.4cm、厚さ0.2cm、重さ1.21g）は完形であるが、三原田諏訪上例（長さ3.1cm、幅1.7cm、厚さ0.3cm、重さ1.1g）は先端部が欠損している。このうち多田綱原例については、実見の結果、打製で良質な褐色系東北頁岩を用材としていることが判明しているが、他の2例については、未実見であるため別途検討としたい。

## 文献

新田浩三・栗田則久・上守秀明 1991 「多田綱原遺跡（No.43）」『東関東自動車道埋蔵文化財調査報告書VI（佐原地区3）』 pp.255-274 財団法人千葉県文化財センター

小林修・日沖剛史 2004 『横野地区遺跡群V 三原田諏訪上遺跡1』 赤城村教育委員会

岩瀬謙ほか 1985 『鶴ヶ丘（E区）』 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団